



折笠さん（右）と「奇跡のリンゴ」の木村さん。北海道での自然栽培普及を試みている

有機農業の中でも、さらに難しいとされているのが堆肥など有機肥料も使わない「自然栽培」だ。ジャガイモや小麦、黒大豆、トマトなど自然栽培を始めて12年の幕別町軍岡の折笠健さん（45）は「うまくいくまで長い月日がかかったが、消費者や家族がおいしいと言ってくれる作物ができるようになった」と話す。

自然栽培を一躍有名にしたのが、青森県弘前市で「奇跡のリンゴ」と呼ばれる無肥料・無農薬栽培を実現した木村秋則さん（64）。折笠さんは木村さんとの出会いもあって自然栽培の道を歩み、「十勝が温暖化したときに合うように」とリンゴも栽培。販路も自ら関東を中心に開拓してきた。

品種開発課題 継続性が必要

折笠さんが重視するのが自然栽培に向く品種。トマトやリンゴでは20～30種類以上を試して合う品種を見つけ出した。

しかし、折笠さんは「（自然栽培を含む）有機はスタートラインにも立てていない」と主張する。「自然栽培が可能なジャガイモは、病気に強いが空洞になりやすい『さやあかね』くらい。研究機関も一緒に育種をしてい

かないと。有機を始めたいと思う生産者がいても選べる品種がない」とし、有機用品種を開発している欧米との差を強調する。

自然栽培を続ける中で、土壌中のミネラル減少など課題も出てきた。「奇跡のリンゴ」は下草（雑草）をそのままにして森に近い環境を再現することで、自然の生態系の中で腐植（腐葉土）を作り出し、病害も予防している。しかし、畑では雑草が作物と競合してしまう。折笠さんは「科学的根拠に基づいた継続性が必要」と、植物を畑にすき込む緑肥や土壌分析を用いて試行錯誤を続ける。

音更町東土狩で57㍏を全面自然栽培する中川泰一さん（44）は「ジャガイモなど土の中の作物は畑から持ち出す養分が多く、自然栽培は難しい」とみる。

中川さんが栽培するのは小麦と大豆のみ。同じ作物を続けて栽培すると連作障害が出るが、豆は5㍏のみで10年間は同じ場所で栽培しない。残りは小麦と緑肥を交互に栽培する。

鍵握る「腐植」 豆の価格は倍

窒素を固定する効果のあるマメ科の緑肥を作ることで「小麦が持ち出した分を補うことができる」とし、「有機」というと堆肥のイメージがあるが、大事なのは腐植」と主張する。

中川さんの経営は少ない労働力、低コストで収益を上げる手法。肥料も農薬も散布しないので、所有する農業機械も最低限だ。収量は小麦で慣行が10俵（約600㍏）を超えるのに対して6俵（360㍏）程度だが、自然環境の影響を受けやすい栽培方法でも収量は「安定している」という。

中川さんによると販売価格は「自然栽培の小麦は慣行の1.5倍、豆なら倍」と、付加価値が高い。手間がかかり、労働も大変という有機のイメージと異なる農法を行う中川さんは、「技術が確立するまで苦労した時期もあったが、今は経営も労働も楽になって生活が豊かになった」と話している。